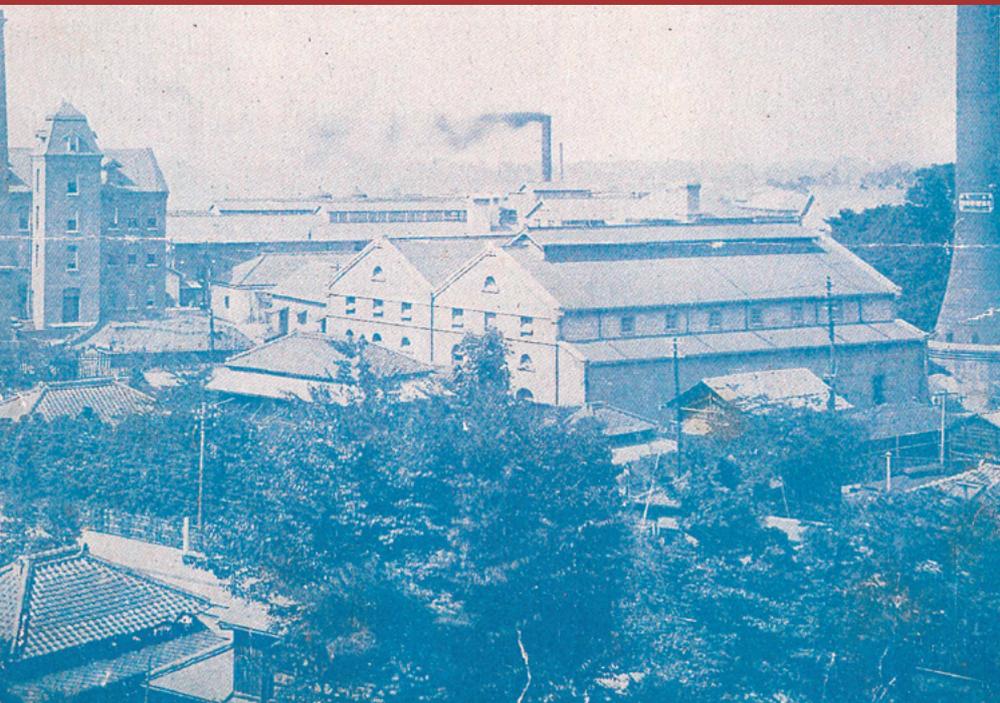
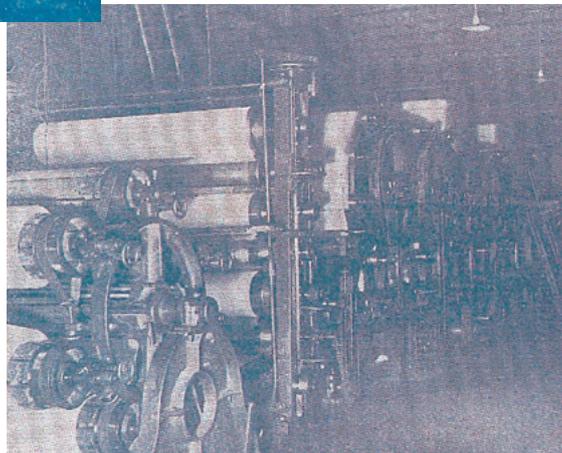


明治黎明期から大正デモクラシー期まで、近代日本の製紙業界を全方位で描いた雑誌を復刻!!

「製紙消費額の多少は、以て国家文明の隆替を測る最良の尺度なり」。明治維新以降、官僚制・貨幣制度・教育・メディアなど近代化に欠かさない要素を下支えした製紙業の幻の業界誌を復刻!



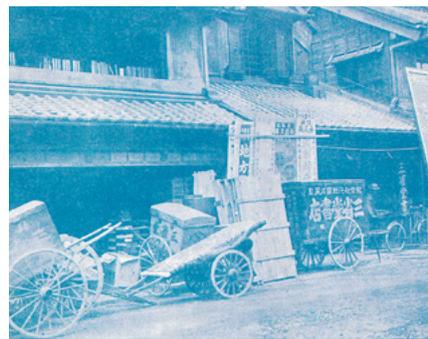
▲王子製紙王子工場全景 (第1号表紙より)



▶梅津製紙工場内部 (第9号より)



◀丸善全景 (第21号より)



▶三省堂書店全景 (第21号表紙より)

復刻版 紙之世界

全3回配本 全10巻・別冊1
明治41(1908)年11月～大正12(1923)年8月

A4判・上製・総約3,800頁

別冊：解説・総目次・索引

※分売可 定価1,100円 (本体価格1,000円+税10%)

ISBN978-4-8350-8749-8

揃定価：297,000円 (揃本体価格270,000円+税10%)

解説

河内聡子 (東北工業大学総合教育センター講師)

推薦

樺山絃一 (渋沢栄一記念財団理事長) 四宮俊之 (弘前大学名誉教授)



▶大正元年の国民新聞編集部一同 (第50号より)

不二出版

復刻にあたって

一八九七（明治三〇）年に創業した大手洋紙店・博進社（現・文運堂）の社長・山本留次が一九〇八（明治四一）年に刊行させた雑誌「紙の世界」一九二二（大正一一）年八月まで刊行されたが、関東大震災のため終刊した。山本留次は博文館創業者・大橋佐平の甥で第一号社員であり、大正・昭和期の代表的日記帳「博文館日記」の考案者と言われている。近現代日本の出版印刷業の先駆けと言える博文館の経営に参画し、かつ自身が博文館の子会社として創業した博進社は日本書籍、東京書籍、大阪書籍の三社が出版する小学校の国定教科書出版のための用紙を独占的に納入していた山本は、まさに製紙業・印刷業・出版業の中枢にいたるといってよく、本誌刊行によって三業を振興させたいという強い願望を誌面から窺うことができる。

記事内容は製紙業を初め、新聞・出版・文房具業界の会社事業紹介・社長の人物譚、内外業界ニュース、業界の動向分析、洋紙の毎月卸値、商品広告を主としている。一九〇五（明治三八）年から日本統治が始まった南樺太での原料調達や新工場設置のニュースもあり、植民地経営史上も興味深い。雑誌自体が商品である用紙で作られたサンプルの意味合いもあり、博進社にとつては商品PRの場でもあった。当時の業界誌「紙業雑誌」では創刊にあたり「美麗なる写真版数多を挿入し、舶来の上等印刷紙を用いあれば、体裁と云い、内容と云い、申分なき好雑誌なり。今や実業家の苦心、経営、成功若しくは失敗に関する記事を以て満載する雑誌は社会の最も歓迎する所となる。此風潮に乗じて紙及び其関係業を専門とする『紙の世界』の出づる事は誠に時好に投じたる美挙と云うべし。」と絶賛されている。

本誌発刊の辞で「製紙消費額の多少は、以て国家文明の隆替を測る最良の尺度なり」と宣言された通り、製紙業は単なる産業にとどまらず、近代国家の官僚制・貨幣制度・教育・メディア・流通の程度を図るバロメーターとなる。国力を測る指標として軍事力や経済力だけではなく、国ごとの文化・芸術・高等教育の普及度・魅力に着目する「ソフトパワー」と「ハードパワー」の狭間に位置する資料と言える。本誌の復刻により日本の近代化について新たな視点の研究が進むことを期待したい。

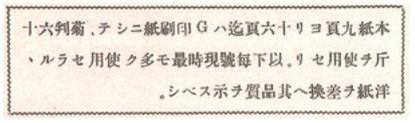
不二出版編集部



山本 留次



発刊の辞



↑本文中にあった使用洋紙のサンプル表示。ほぼ毎号掲示され、様々な洋紙が使用された。

推薦のひとば

洋紙の経済と文化を牽引した業界誌

樺山 紘一

日本の洋紙産業は、明治初年の文明開化のさなか、渋沢栄一をはじめとする実業家たちのもとで、産声をあげました。はじめは抄紙業とよばれたそうです。技術として頂点にあった和紙生産とはべつに、紙幣や公文書の逼迫した需要に応じて、また新聞、雑誌、書籍の制作現場からの急な要請をうけて、近代の洋紙産業の成立が促されました。

それから三〇余年。製紙業は、日本の産業革命の最先端にあつて、花形の実業としての地位をほいままにしています。その一九〇八（明治四一）年、大手洋紙店・博進社の社長である山本留次は、洋紙業界の輿望をになつて、業界雑誌「紙の世界」を発刊します。折から出版・印刷業界の先端を行く博文館とも密接に連携し、紙が仕掛ける経済と文化の壮大なドラマの演出に乗り出します。目覚ましい事業革新という時代の声に押されもしたでしょう。

公務・商務から学校・家庭にいたる、経済・社会の各界に話題を提供しました。「紙の世界」はまさしく、近代日本の経済と文化の焦点に近く位置していたことになるでしょう。しかも一五年にわたる同誌の刊行が、一九二二（大正一一）年の関東大震災をもつて終幕をむかえたことも、どこか象徴的な事柄かもしれません。

今回、復刻される『紙の世界』は、洋紙の生産と流通と利活用のさまざまな側面を、図らずも明らかにすることでしよう。関連する業界や学界から熱い期待の声が寄せられるのも、まことに理由のあるところですよ。

かばやま・こういち（渋沢栄一記念財団理事長）

雑誌『紙の世界』の意義

四宮 俊之

今日の日本は世界有数の紙パルプ工業国で、また関連して多様な加工業や流通業、それと各種の需要先や消費先が全国に集積している。このような多くの業種や業態、需要先などの集積を歴史的に振り返ると、そこには多くの企業家や企業だけでなく、それらに関わった当事者の間で諸情報の交換や共有に関わっていく業界雑誌の存在が幾つか見出せる。明治、大正期に有力出版社として知られた博文館により、系列の洋紙卸売部門として東京で一八九七（明治三〇）年に創立された博進社が、一九〇八（明治四一）年から一五年間にわたつて独自に広く関係先などへ無料配布していた企業月刊誌の『紙の世界』も、その一つであった。

博進社では、創業当初から王子製紙などと代理店関係を築く一方で、独自に輸入紙なども取扱い有力卸売企業の一角を占めていくが、その雑誌の刊行を通じ当時として稀有な企業活動の開明性、先取性を見せていった。その創刊に際しては、紙の生産、流通、消費の多寡が「国家文明の興隆を測る最良の尺度」であるとし、それらの進展に絡む諸情報や知識の報知に取り組んでいくとし、国内外の「紙業界」に関わる記事などを自社による取材や論説も含めて掲載していった。

これまでの私の経営史研究でも、かつて調査先で見つけた本誌の記事を利用したほか、時に業種間で利害を異にする視座の相違を交差させながら理解していく意義を実感したりした。本雑誌の復刻が新たな活用の広がりへと繋がることを期待したい。

しのみや・としゆき（弘前大学名誉教授）

年

1785年

英・『タイムズ』創刊。
世界最古の日刊新聞。

1798年

仏・ルイ・ロベールが長網抄紙機を發明。
製紙業の工業化の始まり。

1854年

独・碎木機發明。木材パルプから大量に
紙が製造できるようになる。

1868年

明治維新。

1869年

北海道開拓使設立。丸善創業。

1871年

築地活版製造所設立。

1873年

抄紙会社（のちの王子製紙）設立。

1874年

自由民権運動の始まり。
以後、民権派新聞続々創刊。



▲「丸善経営の一節」(第45号より)

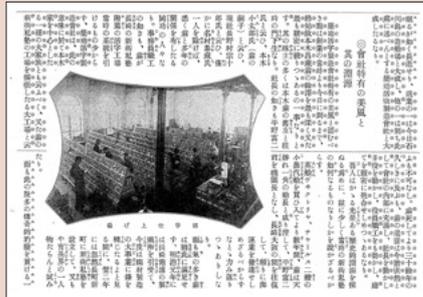
出

来

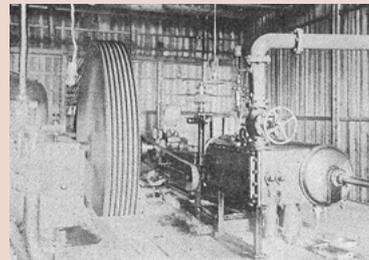
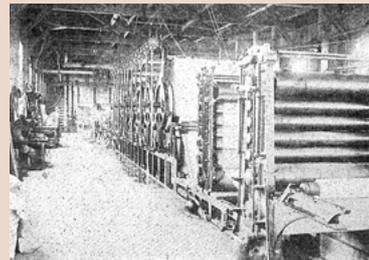
事



▲『横浜毎日新聞』創刊号
(弊社復刻版より)



▲築地活版製作所内の活字仕上げ場
(第2号より)



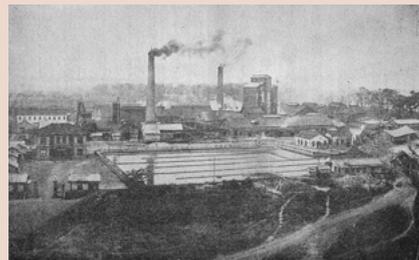
▲日本初の製紙工場を設立した
有恒社工場内部 (第7号より)



▲「富山房経営談」写真は創業者・坂本嘉治馬 (第2号より)



▲「王子製紙株式会社王子工場全景」
右は渋沢栄一、左は当時の専務取締役・鈴木梅四郎
(第1号表紙より)



▲富士製紙北海道新工場全景
(第34号表紙より)

1875年

『横浜毎日新聞』創刊。

1881年

三省堂創業。

1882年

日本銀行設立。

1886年

富山房創業。

1887年

博文館創業。

1893年

『二六新報』創刊。

1903年

国定教科書制度開始。

1905年

日露戦争終結、ポーツマス条約。

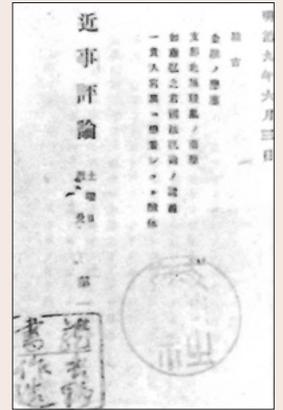
南樺太が日本領に。

『紙之世界』創刊。

第一次世界大戦勃発。

関東大震災。

『紙之世界』終刊。



▲『近事評論』第1号
(弊社復刻版より)
1876年6月創刊



▲『自由燈』第1号
(弊社復刻版より)
1884年5月創刊



▲「台湾三菱製紙所の竹紙料」
(第44号より)



▲「樺太国有林経営概要」
(第43号より)



▲『二六新報』第1号
(弊社復刻版より)



▲「三省堂の経営史と亀井忠一君」
(第21号より)



▲「内地起業家の経営を俟つ満洲の高梁紙製造事業」
当時の関東都督府民政長官・白仁武の談話
(第61号より)



▲「博文館と博進社」
(第12号より)



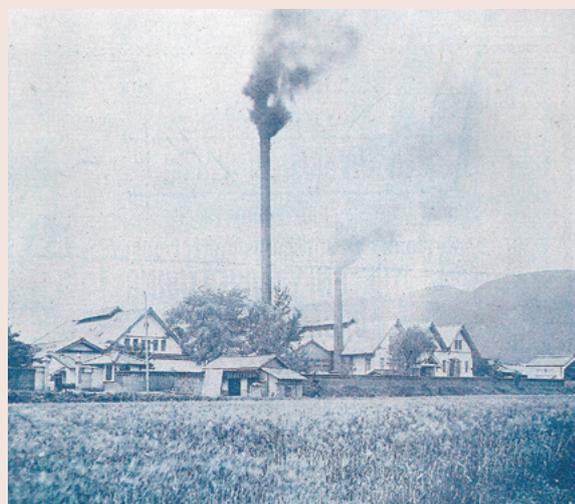
▲出張先のドイツで大戦に巻き込まれ、当初味方になると思われてドイツ人の歓迎を受けたが、のちに日本が連合国側で参戦したために一転して憎悪の対象になった体験が述べられた記事。(第76号より)

▶第一次世界大戦の勃発を受け、「大戦特集号」の体をなした。

1914(大正3)年9月の第71号は

● 主な記事掲載会社一覧 ●

王子製紙	三省堂	同文館	実業之日本社
富士製紙	北越製紙	富山房	台湾日日新報
秀英舎	丸善	凸版印刷	東京板紙
大日本図書	有恒社	三菱製紙	梅津製紙
報知新聞	万朝報	博文館	読売新聞
大阪毎日新聞	東京朝日新聞	都新聞	東京日日新聞
時事新報	東京毎日新聞	二六新報	四日市製紙
中央新聞	日本新聞	国民新聞	東京堂
河北新報	大日本鉛筆	博進社	樺太産業
文運堂	東京築地活版製作所		
国定教科書共同販売所			



▲「京都梅津製紙株式会社全景」(第9号表紙より)

初期の製紙工場は都市部に近い場所につくられた。パルプが主流となる以前、都市住民から出るボロ布が原料として期待されたためである。梅津製紙も京都市内に近く桂川を用水として利用できる地に工場を建てた。



渋沢 栄一

1840～1931。抄紙会社(のちの王子製紙)の創業者。抄紙会社は官僚から実業家に転身したころの渋沢が最も早く手掛けた事業のひとつである。

● 主な記事掲載人物・執筆者一覧 ●

渋 沢 栄 一	亀 井 忠 一	増 田 義 一
本 木 昌 造	野 村 宗十郎	真 島 襄一郎
佐久間 貞 一	三 木 善 八	黒 岩 涙 香
大 橋 佐 平	本 山 彦 一	村 山 龍 平
小 野 金 六	楠 本 正 隆	福 沢 諭 吉
山 本 留 次	三 宅 雪 嶺	陸 実
徳 富 猪一郎	加 藤 恒 忠	大 川 平三郎
得 能 通 昌	大 倉 喜八郎	ジョン・ディキンソン
佐 伯 勝太郎	鈴 木 梅四郎	ノースクリフ子爵
倉 田 雲 平	藤 原 銀次郎	
岡 田 来 吉	藤 井 専 蔵	



大川 平三郎

1860～1936。渋沢栄一の女婿で、外国で製紙技術を学び、数多くの製紙会社創業に関与、「日本の製紙王」と呼ばれた。



大橋 佐平

1836～1901。博文館創業者。明治初期に雑誌・新聞の刊行業をはじめ、次第に事業を拡大。印刷から出版、販売にわたる一大コンツェルンの基礎を築いた。



ノースクリフ子爵

1865～1922。英国のジャーナリスト・実業家。『タイムズ』他英国の新聞各社を買収して「新聞王」と呼ばれた。大戦下の自国プロパガンダに協力する一方、戦場での軍の弱体を糾弾し政権交代に導くなど、紙と筆の力で政府を震え上がらせた。

最近に研究されたる紙料

記者

紙料の研究は、最近ますます盛んになつて來た。これは、紙の需要が急激に増加したためである。従つて、紙料の改良と新種の発見が、紙業界の重要な課題となつて來た。本誌では、最近に研究されたる紙料について、その特徴と用途を詳しく紹介する。

●大和製紙 電氣製紙法
●竹類
●木質繊維
●紙質改良

和紙の現況と救済策

(第20号より)

和紙の現況は、近年ますます悪化して來た。これは、洋紙の輸入が増加したためである。従つて、和紙の救済策を講ずることが、紙業界の重要な課題となつて來た。本誌では、和紙の現況と救済策について、詳しく紹介する。

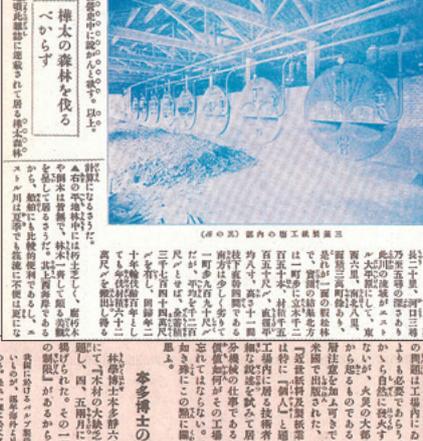
●洋紙の輸入
●和紙の品質
●救済策

樺太の森林を伐るべからず

(第8号より)

樺太の森林は、近年ますます減少して來た。これは、木材の需要が増加したためである。従つて、樺太の森林を伐るべからず、保護することが、紙業界の重要な課題となつて來た。本誌では、樺太の森林の現状と保護策について、詳しく紹介する。

●樺太の森林
●木材の需要
●保護策



「最近研究されたる紙料」

(第19号より)

和紙の現況と救済策

(第20号より)

樺太の森林を伐るべからず

(第8号より)

本多博士の禿山論

(第152号より)

世界各国の産業革命の進展、近代化により紙の需要は鰻登りとなり、原料パルプの国際価格は常に高止まりしていた。本誌中では常に原料不足に悩まされた様子が窺え、木材地の開発伸張、パルプに代わる紙料の発見・発明等の情報はほぼ毎号掲載された。



真島 襄一郎

1852~1913。関西における製紙事業の先覚者。関西地域で多くの製紙関連事業を立ち上げた。本誌記事中では穏やかな人柄がうかがえるが、工業排水の有毒性を心配して押しかけた近隣農民たちの前でコップ一杯排水を飲み干してみせ引き下がらせた逸話も。

教授要目改正と本年の中等教科書出版界

(第41号より)

教授要目改正と本年の中等教科書出版界について、詳しく紹介する。

●教授要目改正
●教科書出版界

文房具研究の必要

(第17号より)

文房具研究の必要について、詳しく紹介する。

●文房具研究
●必要

文房具についての提言記事

(第17号より)

文房具についての提言記事について、詳しく紹介する。

●文房具
●提言記事

小説成金の巨頭徳富花君

(第115号より)

小説成金の巨頭徳富花君について、詳しく紹介する。

●小説成金
●巨頭徳富花君

本邦読書界の趨勢及び

(第62号より)

本邦読書界の趨勢及びについて、詳しく紹介する。

●本邦読書界
●趨勢及び

職工のエイイエンシー

(第81号より)

職工のエイイエンシーについて、詳しく紹介する。

●職工
●エイイエンシー

雑俎欄：株式会社美濃製紙

(第3号より)

雑俎欄：株式会社美濃製紙について、詳しく紹介する。

●雑俎欄
●株式会社美濃製紙

紙の需要の激増は森林の大量伐採、環境破壊をもたらしたが、実業家の関心は低かった。右上のように木材資源確保の観点から大量伐採を危ぶむ声は出ていたが、左下の様に自然林の減少、希少種の絶滅を危ぶむ造園家・本多静六の声は一笑に付された。

1872(明治4)年の学制公布、1903(明治36)年の国定教科書制度の開始により、教育分野も製紙業、印刷業、出版業にとっての重大な関心事となった。実業家たちは次第に文房具事業へと進出していく。

近代日本の最初期に産業化し、多数の工具を抱えることになった製紙業は、労働問題に関わることも早かった。効率化、増収につながる各社の労働者対策は成功例として紹介された。

出版業に携わりながら、実業家たちは同時代の文学動向にはほぼ無関心であった。本誌の文学観が窺われる記事2篇。

復刻版

紙の世界

全3回配本・全10巻・別冊1

A4判・上製・総約3、800頁

別冊：解説・総目次・索引

※分売可 1、1000円
(本体価格1、000円＋税10%)
ISBN9784835087498

解説：河内聡子 (東北工業大学総合教育センター講師)

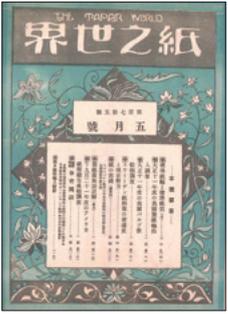
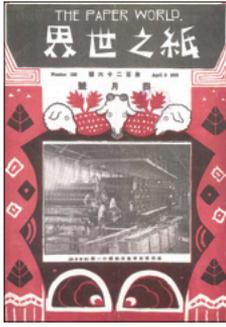
推薦：樺山紘一 (渋沢栄一記念財団理事長)

四宮俊之 (弘前大学名誉教授)

揃定価：297,000円

(揃本体270,000円＋税10%)

第3回配本	第2回配本	第1回配本	配本
第7～10巻・別冊1	第4～6巻	第1～3巻	巻
第110号 (大正6年12月)～第178号 (大正12年8月) ※第177号は原本未発見、未収録。	第53号 (大正2年3月)～第109号 (大正6年11月)	第1号 (明治41年11月)～第52号 (大正2年2月)	原本
118,800円 (揃本体108,000円＋税10%) 8743-6	89,100円 (揃本体81,000円＋税10%) 8739-9	89,100円 (揃本体81,000円＋税10%) 8735-1	価格・ISBN (978483501)
2023年9月	2023年7月	2023年4月	刊行年月予定



類書

●横浜活版社ほか刊 (明治3年～明治39年刊)

全149巻・別冊1

『横浜毎日新聞』は明治3年12月8日(陰暦、日本で初めての日刊新聞として創刊された。当初は貿易商況記事を主としていたが、政論新聞時代の展開とともに政治性を帯びていき、局を横浜から東京へ移し、紙名も『東京横浜毎日新聞』と改め、民権派言論の一翼を担うに至り、俄然注目を集めた。本紙は、日本近代史・政治史・社会史・文化史の研究等に必須の基礎的資料である。

●揃定価3、245,000円 (本体価格2、950,000円＋税10%)

●『東京朝日新聞』の前身紙 (明治17年～明治21年刊)

全13巻・別巻1

本紙は、明治17年5月11日に自由党最高幹部の1人であった星亨によって創刊された小新聞である。本紙の役割は2つあった。第1には政府からの強まる弾圧を受けて、万一それまでの政党機関紙である『自由新聞』が停刊になった際の代用紙たる役割。もう1つは、国会開設や憲法公布を控えて激化し続ける民権陣営と政府との戦いの中で、それまで以上に自由民権運動思想を国民の間に宣伝する機関紙としての使命であった。

●継続後紙の『燈新聞』『めざまし新聞』までを収録し復刻。

●揃定価418,000円 (本体価格380,000円＋税10%)

●『秋山定輔 主宰 (明治26年～明治42年刊)』

全48巻

本紙は、秋山定輔が26歳のとき明治26年10月26日に創刊された日刊新聞である。藩閥政治反対を唱え、朝鮮問題や中国の動向に注目した独立の政論新聞であったが、いったんは経営難から休刊した。明治33年、再興された『二六新報』(第二次)は、三井財閥攻撃・娼妓自由廃業支援・労働者懇親会の開催など社会問題のキャンペーンに重点をおき、紙面を大衆向けに面白くし、かつ廉価販売によって、全盛時代には『万朝報』を抑え最高18万部を発行した。

●揃定価1,056,000円 (本体価格960,000円＋税10%)

●『成功』

全32巻・別巻1

『成功』は、明治35年に創刊された青少年向けの総合雑誌である。スマイルズの『西国立志編』に続く、若者向け啓蒙誌の必要性を感じた村上濁浪が、裸一貫から創刊した。当時一級の知識人、文豪、実業家らが「自助」「学問」「裸養」による「立身出世」「成功」への道を説いた。特別賛成員の、幸田露伴、井上円了、巖本善治、徳富蘇峰、村上专精、志賀重昂らは気鋭の知識人であり、若者たちが憧れた人土であった。近代教育体制確立時の目に見える「時代の空気」を伝える本誌は、近代教育の未開拓領域を解明するであろう。

●揃定価809,600円 (本体価格736,000円＋税10%)

●推薦：寺崎昌男・竹内洋・辻本雅史・新谷恭明・菅原亮秀

表示価格はすべて税込

不二出版

〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 0016002940084